

人類と言語の進化

内田 亮子

早稲田大学国際教養学部 教授
人文学部異文化交流研究施設第 35 回講演会
2018 年 12 月 12 日

生物進化の誤解

チャールズ・ダーウィンが『種の起源』(1859)を發表して約 160 年が過ぎた現在でも進化という概念は多くの人に誤解されている。進化とは、遺伝に影響を受ける形質(特徴)の集団内での頻度分布の世代を超えた累積的变化のことである。従って、変異(バラつき)の適切な認識が進化を理解する上で重要である。だが、私たちの脳は変異を認識し情報処理すること、つまり、進化を理解することが苦手といえる。

一般的に、人間を含めた生物は境界が明確な「かたまり」で認識され、さらに、かたまりは下から上に縦に並べて認識されることが多い。ダーウィンは変異に注目することでこの生命観を否定し、そして生命の歴史は共通の祖先から派生する藪状と唱えた。この生命観では、人間は他の動物と同列に並ぶ。また、人間という生き物の中にも変異があり、民族あるいは集団も、共通の祖先から派生してきたので、縦に下から上へ並べるなどできない。

人類の起源は約 700 万年前と推定され、現在では十数種の化石人類が存在したことがわかっている。形態だけに注目しても、それぞれの化石人類が示す特徴、その組み合わせの変異は著しい。また、古代(Ancient)DNA の解析技術により、ホモ・サピエンスは他の人類と交流があったこともわかっており、遺伝的変異は非常に複雑な様相を示す。それらの人類がどのような関係にあるのか、どのような生活をしていたのかについて、未だ解明されないことは多い。ただし、人類進化も他の動物と同じような藪状であることは明らかである。

赤の女王と人類進化

生物は生息環境の中で他の生命やウイルスなどと共存しており、その関係は「軍拡競争」の状態といえる。これを示すのがヴァン・ヴァレンの「赤の女王仮説」である。生物の置かれた状況とは、ルイス・キャロルの『鏡の国のアリス』の一場面そのものといえる。赤の女王とアリスは一生懸命走るのだが、気がつくと同じところにいる。そこでは同じところに居続けるには一生懸命に走らなければならない。つまり、生物は互いに手を繋いで走っている状態にある。一つの生物だけ飛び出しても、他の生物がすぐに追いつく。また、個体の中の組織の一部だけが勝手に変化することはない。人類もおそらく他の生物と手を繋いで進化してきたのだが、ある時点でその手を振り切って飛び出してしまった。それを可能にしたのが文化であり、言語の能力だと考えられる。さまざまな議論がある文化の特徴だが、認知科学的には「社会的に学習され伝播する情報」と定義することができる。そして、動物の文化と異なる人間文化の特徴その蓄積性であり後戻りをしないことである。人間文化を特異的にした主な要因の一つが、言語を可能にする認知能力と

考えられる。

言語の進化

言語の進化については、いつ現在のような言語が始まったのかという問いが最も素朴なものであろう。しかし、現時点ではその答えはわかっていないし、今後も解明は極めて困難と思われる。何故ならば、言語は、複数の異なる認知機能および解剖学的特徴がおそらく別々に進化し、そして、ある時点から統合されるようになって確立されたものである。その完成形がいつからなのかという謎を、過去の証拠や現代人をいくら分析しても簡単に解くことはできない。言語に関わる遺伝子は多数みつまっているが、いずれも言語の遺伝子ではないので、その変異からも言語の起源を推定することはできない。

これまでの言語進化研究は、生成文法理論をもとにした研究と認知言語学的研究が主なものである。前者は、言語構造、特に併合とそれを可能にする認知能力の生得性を主張する。後者は、言語習得は学習・使用ベースで行われるとし、言語構造の生得性は否定する。近年では、両者統合の重要性を主張する生物言語学者および認知神経学者たちによって、より学際的な言語進化研究も進められている。

テリー・ディーコンはチャールズ・パースによる記号論の視点から言語の象徴性の分析を試みている。動物コミュニケーションは、記号論的にはアイコン的あるいはインデックス的であり、人間言語のみがシンボリック特徴を示す。シンボリックサインはインデックス的に対象物を指し示す（接地している）のではなく、「翻訳」の第三項を介して意味が伝わる。翻訳の鍵はそのサインを使う集団メンバーによって社会的に共有される必要がある。そのサインとは言葉、語彙である。なお、物につけられたラベルは、社会的合意のもとで含有するものの拡大や修正ができ、ラベルそのものも変えることが可能である。そして、私たちは象徴的言語に依存するようになった。

象徴思考、そして人間の現在と未来

象徴思考、そして言語を獲得した人間は、効率よく蓄積できる文化や文明を格段に発達させた。近縁のチンパンジーはいまだに森の中で椰子の種を石や木のハンマーで割っているが、人間は宇宙に進出している。ただし、象徴的思考、そのカテゴリー化する特徴によって、人間は変異を認識しそのまま情報処理することが苦手となった。象徴的カテゴリーは自由自在に変更することもできるはずだが、それには制限があるようである。部族・民族間の紛争は絶えず、人種という非科学的な概念も根強く残っており、奴隷のような制度も、残念ながら消えてはいない。

人類と言語の進化を語ることは容易ではない。人間の特異性の理解するためにも、ダーウィンが強調したように変異を理解し、他の動物と比較し、生物の歴史を知ることの重要性を再度認識する必要がある。生物にとって未知の領域へ、進化の遺産を備えた心身とともに突き進む私たちの未来はどのようなものであろうか。